

新しい社会運動とネットワークング

朴 容 寛

目 次

- はじめに
- 1. 旧来の社会運動
 - (1)旧来の社会運動とその理論
 - (2)旧来の社会運動の特徴
- 2. 新しい社会運動
 - (1)新しい社会運動とその理論
 - (2)新しい社会運動の特徴
- 3. ネットワーキング
 - (1)ネットワークングの位置づけとその類型
 - (2)新しい社会運動としてのネットワークング
- おわりに

はじめに

今日、社会の諸現象を表わすために「ネットワーク」、「ネットワークング」などの言葉が用いられ、受け入れられるようになった一つのきっかけは、社会運動領域における諸研究、とくにリップナックとスタンプス(Lipnack J. & J. Stamps)の『ネットワークング』(1982)である。ネットワークングとは広い意味で「ネットワークづくりのプロセスとその背後にある価値観まで含むもの」であり、狭い意味では「ネットワークを通じて社会に何らかの働きをかけようとする諸活動」である。本稿では、主に後者に焦点を合わせ、ネットワークングはいかに位置づけられるのか、新しい社会運動とどのように関係しているのかを明らかにしたい。まず、社会運動¹⁾を「旧来の社会運動」と「新しい社会運動」(nouveaux mouvements sociaux)とに分け、それぞれの特徴を探った後、ネットワークングの位置づけなどを論じたい。

社会運動論には、ヨーロッパに源を発する流れとアメリカに源をもつ流れがある。前者はマルクス主義あるいはそれと近い立場に立ち、社会変革の主体としての労働者運動(ないし労働組合運動)を論じるものである。後者はアメリカのシステム論ないし機能主義の立場に立つ理論である。この立場の理論はアメリカ型の多元的かつ民主主義の社会を均衡的なシステムと見る。これによると、社会運動はシステム内で問題が発生、累積し、緊張(strain)が高まることを契機に生じ、問題の解決によりシステムが均衡状態を回復すると

ともに沈静化する、というサイクルの中に位置づけられる。「新しい社会運動」は、どちらかといえばヨーロッパ系譜の社会運動である。この「新しい社会運動」に対応するアメリカ系譜の社会運動は資源動員論(resource mobilization theory)である。1970年代以降のアメリカを中心とする社会運動論も、伝統的な集合行動論の非日常性や情動性、非制度性などを批判しながら、その日常的・制度的な政治活動との連続性、社会問題解決の合目的性などを強調する。両者とも、運動のネットワークを重視しているが、資源動員論はそれを「利害の共同に基づく連帯」²⁾と見るのに対して、「新しい社会運動論」はそれをアイデンティティーと意味の共有と見る。このようにヨーロッパを起源とする社会運動とアメリカに源を発するそれとは異なるが、脱産業社会ないし情報化社会における社会運動³⁾を扱うようになるに応じて次第に両者は重なる部分も多く生じている⁴⁾。本稿では、一応前者を中心に論を進めたい。

1. 旧来の社会運動

(1) 旧来の社会運動とその理論

アメリカ社会(特にシカゴを中心に)は19世紀末から20世紀初頭にかけて大量の移民を受け入れるとともに産業化、都市化が急速に進み、コミュニティは解体され、いち早く流動化社会となった。そこではパニック、流言、群衆行動、集団的熱狂、リンチ、テロル、デモなどが次々に生じた。これらの群衆行動を説明する社会運動モデルとして現れたのが「集合行動論」である。ところが、これらにトゥレーヌ(Touraine, A.)が言っている歴史的なアクターとしての性格があるかは疑問である。それゆえ、アメリカの集合行動論にせよ、その批判として現れた資源動員論にせよ、トゥレーヌの概念でいう「社会運動」であるとは言い難い面がないとはいえない。

しかし、スメルサー(Smelser, N. J.)の『集合行動の理論』によると、集合行動にはパニックのようなものだけではなく、規範志向運動や価値志向運動もある。規範志向運動は「一般化された信念の名において規範を復興し、防衛し、変革し、あるいは創造しようとする試み」⁵⁾である。これに対して、価値志向運動は、「一般化された信念の名において価値を復興、防衛、変容、創造しようとする集合的な企て」⁶⁾である。つまり、価値志向運動は社会の一連の基本価値の再構成、社会生活の基盤のより全面的な再組織などを目指す。この価値志向運動はトゥレーヌの言う「社会の自己産出」の方向づけに相当するものと思われる。こう考えると、トゥレーヌとスメルサーの理論は、普通に考えられているほど接点がないわけではない。

それでは、トゥレーヌが言っている旧来の社会運動はいかなるものであろうか。彼は旧来の社会運動として、主に階級的利害の対立・矛盾・不平等を克服するために被支配者(被搾取者)が自ら組織を作り、基本的な解決を目指す労働運動を挙げている。彼は労働の場を産業社会における中心的な歴史的場面とみなし、いわゆる労働者の行動を、政治的行為(action politique)としてみる。彼によると、労働運動は「工場の指導者(dirigant)としてではなく貨幣のエージェントの主人と見なされる資本家に対する民衆の闘争」⁷⁾である。つまり、彼が強調するのは歴史性の社会的方向づけなのだ。それゆえ、彼は労働運動を単にプロレタリアートの蜂起でなく、労働者による「産業社会の対抗モデル」の提示行為⁸⁾として理解する。労働運動が目指すのは、社会の「転覆」ではなく、むしろ社会の「方向

変更⁹⁾である。それゆえ、労働運動は搾取(支配)層に対抗して権力の奪取を目指す「指導された階級の行為」としてのマルクス主義的社会運動とは異なる¹⁰⁾。

ところが、ある意味ではマルクス主義的社会運動も、産業社会の諸矛盾に対するオルターナティブの提示であり、歴史形成システムの一つの方向提示であるとも解釈しうる。トゥレーヌの社会運動の規定からみれば多少の議論の余地が残るが、本稿では物質的な生産力や階級闘争を中心に社会の変革を唱えるマルクス主義的な社会運動も産業社会の社会運動として捉えて論じたい。

(2) 旧来の社会運動の特徴

このように旧来の社会運動は多様な変種がある。ところが、これらの社会運動は同じ産業社会という土俵で行われるばかりでなく、次のような共通の特徴が観察される。つまり、旧来の社会運動は合理的運動であり、階級闘争型運動であることである。

まず、第一に、旧来の社会運動は「合理的運動」としての性格をもつ。産業社会では効率的に財貨生産を行う会社という組織をつくったのと同じように、社会運動分野においても、一定の目的や統一的行動綱領や規約をもつ何らかの組織をつくり、効率的に社会運動をしたのである。財貨生産では分業の原理がある如く、社会運動でも指導部や宣伝部などの役割分担があった。要するに、旧来の社会運動では、社会運動を合理的かつ効率的に成功させるために「組織化」を図ったのである。旧来の社会運動がこのように組織を強調したのは、他ならぬ組織化を通して集団力を作り出すためであった。いわゆる「烏合の衆」の突発的な共同行動もありうる。しかし、この場合、集団力は目的に合わせ正しくコントロールすることができないばかりか、自らを傷つける危険さえある。それゆえ、目的意識を持った計画的な分業体制をもつ組織的運動¹¹⁾を目指したわけである。この組織目的の表現が綱領であり、組織活動の意志の表現が規約である¹²⁾。ルカーチ(Lukacs, G.)の階級意識論によれば、このような組織の問題は単に理論の問題でなく、実践の問題であり、精神的な問題である。ルカーチは、組織は「理論と実践とを媒介する形態」であり、革命の成功・失敗は組織によって左右されるのだと強調した¹³⁾。

第二に、旧来の社会運動は階級闘争的な性格を持っている。特に社会主義運動は、被搾取(被支配)層の搾取(支配)層に対する闘いである。この階級闘争を効率的に行うために、彼らは連帯闘争を図る。つまり、様々な社会運動がそれぞれ独立して運動を展開する限り、所期の目的は達成しがたくなる。そこで、大きな共通目的を掲げ、連帯闘争を図るのである。とはいえ、連帯闘争に参加する個々の組織の独自目的や独自活動などが否定されるわけではない。例えば、「警職法」改正反対のために青年団・婦人会・労働組合・全学連などが連帯闘争するとすれば、そこで掲げられる大きな共通の目的は、この法案の成立を阻止することであり、そのために各組織が連帯して反対の集まりやデモを行う。けれども、労働組合は労働組合として独自の目的に基づいて反対するのである¹⁴⁾。さらに、社会主義運動になると、労働者・農民・インテリゲンツィアの連帯を強調する。そこには被搾取階級の代表たる労働者・農民のための政党が階級的・反体制的社会運動の「前衛」となり、連帯闘争を指導し、最終的には変革の目的である共産主義革命を導くのである¹⁵⁾。

2. 新しい社会運動

(1) 新しい社会運動とその理論

新しい社会運動の性格規定をめぐってバラエティーがあるが¹⁶⁾、本稿では新しい社会運動の流れを産業社会からプログラム化社会(societe programme)¹⁷⁾への転換を伴って社会の自己産出能力の提示を強調するトゥレーヌの行動社会学のパーспекティブ、後期資本主義における諸問題に注目するハーバーマス(Habermas, J.)、オッフエ(Offe, C.)らの批判社会学のパーспекティブ、そして、現代社会を複合社会(complex society)¹⁸⁾として規定しながら社会の「自己再帰性」に注目するメルッチ(Melucci, A.)の構築主義パーспекティブなどに分けて検討したい。

1) 行動社会学のパーспекティブ

トゥレーヌは社会運動を「歴史性のレベルの肯定的な闘争」であり、普遍的な社会の文化モデルを提示し、社会の自己産出の方向を示す闘争として認識している¹⁹⁾。彼によれば、産業社会においては労働運動がその役割を果たした。つまり、労働運動は「進歩や工業という当時の新しい価値の体现者であり、そのようなものとして社会の自己産出の方向をめぐる紛争のなかで中心的なアクター」²⁰⁾であった。しかし、プログラム化社会になると、労働運動は企業、諸利益団体および政府などの政治システムのアクターとともに、ネオ・コーポラティズム的体制を作り上げ、「制度レベルの肯定的闘争」となった。それゆえ、労働運動はもはや歴史的に中心的なアクターではなくなった。それではプログラム化社会における新しい価値の体现者であり、社会の進むべき方向を創造する歴史的に中心的なアクターは誰であろうか。トゥレーヌがそのアクターとして挙げているのは、女性運動、地域運動、反核運動である。

第一に、女性運動はただ女性の権利を防衛しようとするフェミニズムとは異なり、「女性を従属した存在として生産し、男性を支配の手先として生産した支配システム」に異議を申し立てて、女性たちが立ち上がる闘争である。女性運動は女性を排除、あるいは劣等化させる支配システム、つまりテクノクラートとの闘争なのである。それゆえ、かつての婦人参政権、男女間での賃金と職業機会の平等などの女性の自由と平等を求める日常的権利要求を求めて闘ったフェミニズムとは異なる²¹⁾。

第二に、先進国による文化的な植民地化に対抗して、国民的文化の特殊な存在理由や諸権利などの「民族としてのアイデンティティー」を求めている地域運動が広がりつつある。例えば、自分たちの文化の尊重を求める黒人、インディアン、メキシコ系アメリカ人たちの運動がそれである。一方、国家内の植民主義に抗して自分たちの言語と文化、そして自律的な集団的活動を求めている闘争がある。例えば、フランスにおけるブルターニュ人、バスク人、コルシカ人、アルザス人、フラマン人、そしてオック語を話す数多くの人々の運動がそれである。すなわち、国民的共同体が外国に支配されている場合には、国民的解放とともに自民族のアイデンティティーを要請する民族闘争が、中央の国家に内部植民地化されている諸地域においては、それに対抗する地域闘争となる。いずれにせよ、「押しつけられる支配に対抗」して、「自己の過去の再発見によって自己の未来を構築」しようとする社会運動である²²⁾。

第三に、トゥレーヌは産業社会の労働運動と同様に、プログラム化社会における中心的

な役割を果たすのは「テクノクラートと一般公衆との間の紛争」であると主張する。つまり、巨大な管理装置を通じて一つの生産様式と一つの社会変革方式を押しつけているテクノクラートに立ち向かう闘争なのである。その代表的なケースが反核運動である。反核運動は最初は核産業の恐るべき結果を告発すると同時に、自分たちの伝統的な生活様式や生活圏を守ろうとする防衛的な地域運動から始まる。しかし、核産業が権力の集中とテクノクラシーの統治をもたらすことが認識され、核テクノクラート、さらにテクノクラート一般を敵とする反テクノクラート運動になる。それは結局、産業中心的価値体系や科学技術の管理から生まれる権威主義に対する異議申し立てなのである²³⁾。

2) 批判社会学のパーспекティブ

ハーバーマス、オッフエらは、トゥレーヌのように新しいタイプの社会への移行に伴う運動よりも、資本主義社会の進歩した段階(後期資本主義社会)²⁴⁾における問題、つまり「近代化による近代的批判」(modern critique of modernization)²⁵⁾を取り挙げている。すなわち、後期資本主義段階に至ると、社会システムの統合のために国家介入が大きくなるが、これはむしろ自律的な「生活世界の植民地化」²⁶⁾をもたらす。このように危険に曝された生活様式を防衛し、再建するために新しい社会運動が起こるのである。したがって、新しい社会運動は、従来のような分配の問題ではなく「生活形態の文法」²⁷⁾を問う闘争なのである。

ハーバーマスによれば、この運動には攻撃的であり、新しい領土の征服を目指す「解放のポテンシャル」と、防衛的な性格を持ち、領域内において制限を加え、対話的構造を持つ行為領域を生かそうとする「抵抗及び退却のポテンシャル」の双方を含む。アメリカの公民権運動や女性解放運動などが前者の例である。後者の例としては、反原子力とエコロジーの運動、平和運動(南北抗争も含む)、住民運動、オルターナティブ運動(家屋占拠者と対案プロジェクトといった大都市における示威行動と、農村のコミュニオンを含む)、少数者(老人、同性愛、身体障害者など)運動、生活相互相談グループや青少年の諸宗派のようなサイコ現象、宗教的原理主義、税制反対運動、父母会組織による学校批判運動、現代主義的改革への抵抗運動などが挙げられる²⁸⁾。

一方、同じく批判社会学のパーспекティブをもつオッフエは政治パラダイムに重きをおく。つまり、彼によると、自由民主主義福祉国家(古いパラダイム)は中央集権的な管理機構の援助の下に地域社会や個人をおき、個人の他律化を招いた。したがって、自治と分権、経済的自律、アイデンティティーなど失われた自律性を回復することによって国家介入を拒否ないし抑制しようとする新しい政治化(新しいパラダイム)を求めるための社会運動がひき起こるのである。これが「新しい社会運動」なのだ²⁹⁾。

3) 構築主義パーспекティブ

メルッチはハーバーマス、トゥレーヌらの理論を批判的に継承しながら³⁰⁾、そのオルターナティブとして「運動ネットワーク」(movement networks)、ないし「社会的空間」の形成プロセスを提案している。すなわち、自己再帰的な情報資源を中心に運行される複合社会においては、社会的地位、社会的交流のネットワーク、準拠集団(reference group)などの多様化が見られる。それゆえに諸個人は様々な組織に参加せざるを得なくなる。このような社会の変化の加速、所属組織の多様化に伴って、各個人が交換する情報の量はこれまでとは比較できないほど増大する。したがって、従来のアイデンティティーの基礎を

なす伝統的な準拠点(教会、党、人種、階級)の力は弱まり、故郷喪失の状態³¹⁾になる³²⁾。それゆえ、各個人は状況の変化や出来事の発生に対して、自己の故郷を絶えず再建するために管理や抑圧から自由な社会的な場を形成しなければならない。この場とは他ならぬ「運動ネットワーク」である。つまり、メルッチは今日の運動の常態を「文化的革新を経験し、実践する中で個人的な関与を必要とする日常生活の中に潜んでいる小集団のネットワーク」³³⁾として捉える。このような空間を形成することによって、集合的行為に参加する人々の連帯を強め、その要求の継続を保障し、外部世界との争いや交渉を可能とするのである³⁴⁾。要するに、メルッチによる社会運動とは連帯に基づき、紛争を担い、行為が生じるシステムの限界を打破するような集合的行為³⁵⁾なのである。その組織の形態は自己再帰的性格を帯びており、複合社会の文化コードに対抗する生活スタイルの表現である。例えば、イタリア北部を中心として起こった赤い旅団という突出部分をも生み出した新左翼運動、1981年末に起こったミラノの建物占拠とそれに続く首都若者センター運動、墮胎公認をめぐる盛り上がったフェミニズム、トリエステを中心に起こった精神病院解体運動などがそれである³⁶⁾。それゆえ、このような社会運動ネットワークに参加するのは、自己表現や自己実現となると同時に、複合社会の諸病理に対する告発になるのである。

(2)新しい社会運動の特徴

それでは「新しい社会運動」を旧来の社会運動と区分しうる特徴は何であろうか。旧来の社会運動がその闘争力を高め、その目的を効率的に達成しようとする「合理的運動」であり、被搾取(被支配)層と搾取(支配)層との「階級闘争型運動」であった。これに対して、新しい社会運動は運動の目的よりも運動のスタイルやそのプロセスを重んじ、運動それ自体に意味を付与する「自省的運動」であり、「生活世界の植民地化」を強いる社会システム、つまりテクノクラートに対抗して、新しい価値や文化モデルを創造しながら、それを自ら身につけようとする一般民衆の闘争であるといえる。

まず、第一に、新しい社会運動は「自省的運動」である。新しい社会運動は、成功と失敗という効率性を基準とするのではなく、メンバーの自己実現やその意味表出プロセスを重要視する。それゆえ、「鉄の規律」の下に指揮される統一的な行動を要求するわけではない。むしろ、メンバーの自律性、個性などを尊重するのである。また、今までの産業社会の諸価値、諸原理、諸制度を省み、新しい価値、新しい行動原理、新しい文化モデルを創造するのである。このようなビジョン、あるいはコンテクストを共有する人々の間では次第に連繋ができ、互いに助け合い、協力し合うのである³⁷⁾。このような志向性について、トゥレーヌは支配システムによって次第に歴史的な現実から遠ざけている信念に関する倫理と、人々を政治的アクターの影響の下に従わせる効率の倫理との「引き裂かれ」(dechirement)³⁸⁾として、ハーバーマス、オッフエらは介入主義的福祉国家による市民生活への侵入に対する抵抗として、そして、メルッチは自己再帰的アイデンティティーの形成、維持、修正として、それぞれ表現している。いずれにせよ、運動の最終的目標やその効率的な達成を狙う「合理的運動」でなく、自己省察(self-reflection)、あるいは自己実現などを求める「自省的運動」であるといえる。とはいえ、ただ新しい価値、新しい行動原理などを唱えるものではない。自らその価値や行動原理を身につけ、実行可能なオルターナティブを学び、そのうえで日常生活に活かすのである。トゥレーヌによれば、新しい社会

運動を推進している人々は、「行動の変革は思想の変革よりもはるかに重要」であると悟り、「自らが創造したいと願っている社会生活のイメージに合わせて生活」するのを望んでいる³⁹⁾。一方、ファーガソン(Ferguson, M.)やエルジン(Elgin, D.)によれば、新しい社会運動にかかわる人々の多くは効率中心的な産業社会がもたらした諸問題に対して異議申し立てを行うばかりではなく、自ら好んで簡素な生活(voluntary simplicity)を選んでいる⁴⁰⁾。

それでは自律性や創造性などを尊重する「自省的運動」はいかなる組織構造をもつのであろうか。トゥレーヌによれば、労働運動はナショナル・センターに集中していたが、新しい社会運動は分散しており、強力な中央集権化された組織ではなく、むしろ、組織網⁴¹⁾をなしている。また、メルッチも、新しい社会運動の常態は「小集団のネットワーク」⁴²⁾であると主張している。一方、黒人運動、新左翼、女性運動、エコロジー運動などの新しい社会運動を調査し、分析したジャーラック⁴³⁾は、これらの組織構造は環節的(segmentary)であり、多頭的・分権的(polycephalos and decentralized)であると同時に、網状(reticulate)であると語っている。要するに、旧来の社会運動の組織構造は効率中心的なヒエラルキー型構造であるとするれば、新しい社会運動のそれはより水平的なネットワーク型構造であるといえよう。

第二に、新しい社会運動のもう一つの特徴は「テクノクラート⁴⁴⁾に対する一般民衆の闘い」である。トゥレーヌによれば、新しい社会運動の担い手は、社会のなかでのマイノリティー、あるいは相対的な劣位にあるものが自分のアイデンティティーを防衛するために、そのような構造を再生産するテクノクラートと闘う⁴⁵⁾。新しい社会運動は、巨大な管理装置を通じての一定のライフスタイルと社会変革のあり方を強要しており、消費者の需要まで生産し、コントロールし、供給に適応させているテクノクラートに対抗して、自らのライフスタイルとアイデンティティーの自己決定権を守ろうとする闘争なのである。したがって、今日では国家が唯一の権力の中心であり、異議申し立ての対象となっている。それゆえ、従来 of 労働運動のような社会闘争は今では政治闘争によって置き換えられ「国家に対立する市民の闘争」⁴⁶⁾になっている。このように新しい社会運動は国家、あるいはテクノクラートに対する一般民衆との闘いになるゆえに、その権力は隠蔽され、中立的な手続きの中に織り込まれ、見えなくなる。新たな紛争はこの権力の影の部分や支配秩序を白日のもとに曝す機能を持っている⁴⁷⁾わけである。

3. ネットワーキング

(1) ネットワーキングの位置づけとその類型

従来、より利益を上げるために、より効率的な手段と方法を求めてきた。その方策が分業の原理であり、科学的管理法であり、フォーディズムであった。組織は機械のようにデザインされ、ヒエラルキー構造をなした。組織の中での人間は組織の目的を達成するための一つの歯車のように扱われるようになった。その結果、成長が自己目的化され、物質的に豊かな社会になった。ところが、他方では環境破壊、資源枯渇や人間的な接触の欠如などの病理現象を生み出すようになった。これらの諸病理を生じさせてきた諸原理や諸制度に対して反省を加え、これらを取り除き、新しい価値や行動原理を創造しようとする自由かつ自律的な市民の活動、人間的な接触と協力を図ろうとしている動きがネットワークである。それゆえ、ネットワークは、次のように産業社会の諸制度、諸組織、諸機

構に対する一つの異議申し立てとして位置づけられる⁴⁸。

第一に、健康や医学分野における新たな考え方を共有する「治療のネットワーク」がある⁴⁹。このネットワークに携わる人々は、肉体を機械的に修繕しようとする態度に対してアンティテーゼを唱えている。治療のネットワークに携わっている人々は、古い枠を越え、新しい技術を取り入れながらも人間の心や対人関係も大切にす。身体だけの健康ではなく、心と絡み合っているホリスティック・ヘルス(総体的な健やかさ)を唱えている。また、自分の努力によって健康を保持し、管理しようと努める。ウーマン・ヘルス運動やセルフ・ケア運動、コンシューマー・ヘルス(消費者としての健康)運動がそれである。

第二に、協同組合運動やコミュニティー運動、不要品交換、互助会のような共同生活を求める「共有のネットワーク」がある⁵⁰。旧来の消費者と農業生産者との「生産者主体の協同組合」とは異なって、1970年代に起こりつつある新たな協同組合運動は書籍や衣類、住宅まで、あらゆるものを共同で購入する「消費者協同組合」である。これはコミュニティーの再建設を目指す運動と絡み合って、地域の自立運動につながる。地域の自立運動は社会階層、経済状況、人種、宗教、性などの違いを越えて行われる。そこには地域の人々の間で物々交換を行ったり、金ではなく時間、クレジットなどが通貨となったりする。例えば、カナダのLETS(Local Exchange Trading System)のグリーンドルと呼ばれるクレジットを用いた局地的な互惠システム⁵¹、神戸灘生協の高齢者介護ネット、神奈川生活クラブ生協のバーターネット、そして静岡の高齢者・障害者介助、産前・産後の介護、家事一般のネットワークなどがそれである⁵²。

共同住宅をつくり、そこで庭を共有し、ときどき食事を共にするコミュニティーを夢見る動きもこれにあたるだろう。例えば、財団法人アーバンハウジングは、1986年から3年間研究調査を実施し、共同生活を組み込んだ都市住居アーバンコレクティブハウジングを提案している⁵³。同提案書によれば、この集合住宅に住むすべての人々が、互いの自由と自立を尊重しながら、相互扶助と楽しみ合いの一つのコミュニティーをつくることを図る。1住棟当たり10戸ないし60戸程度のこの住宅には、私生活と私空間の充実・確保とともに、時間の共有・共同することを目的とする共有の空間をつくる。例えば、共同調理と食事(週何回かの夕食、当番制調理、食財の共同購入)、共同保育(0歳～学童)、共有スペースでの趣味、遊び、会話、各種情報交換、共有スペースのメンテナンス、掃除などのために、キッチン、食堂、居間、サンルーム、バー、広い廊下、ホビールーム、AVルーム、テレビ室、洗濯場、大物洗いの洗濯機、物干し場、庭、屋上庭園、テラス、ゲストルーム、OA機器ルーム、図書室、スタディールーム、トランクルーム、不要品置場、共同保育室、子供の遊び場、エクササイズルームなどを共有する。

第三に、エコロジーとエネルギー問題から現代文明を省みる「資源利用のネットワーク」がある⁵⁴。このネットワークに携わる人々は資源の浪費ではなく、よく考えてそれを使うという考え方をもっている。土、海洋、空気などを汚染のない状態で守り、あらゆる種とその生存形態を保護しようとする環境保全運動、原子力、核兵器の恐るべき破壊力に立ち向かって闘う反核運動、そして従来の再生不能な化石燃料に代わる将来のエネルギー需要、エネルギー源に対してソフトなパス(soft energy paths)⁵⁵をとろうとする再生可能エネルギーのパイオニア、そして、自然と調和する旧来のエネルギー(太陽、木材、風、水など)の再発見をしようとする適正技術(appropriate technology)グループの諸ネットワークがある。

これらのネットワークに参加している人々は、主義、主張だけを唱えるものではない。「あらゆる分野の人々が、もっと軽く、もっと易しく、もっと慈しみ深く世界に触れるような、もう一つの別な生き方」⁵⁶⁾、つまり、自ら喜んで簡素な生き方をとるのである。

第四に、権力と富が一つの価値体系をなしている現代社会に対抗する「価値のネットワーク」がある⁵⁷⁾。現代の資本主義社会は利潤が唯一の経済的動機であり、人間としての価値を無視している。このように、危機に瀕している人類や地球を守るために立ち上がっているネットワークがそれである。このネットワークは比較的小さな少数民族から始め、徐々に広い範囲へと、アメリカンインディアンから黒人、貧しい人々、女性へと広がりつつある。さらに、このネットワークに携わっている人々は、地球の破滅によって死滅するかも知れない危機を回避するために、世界最終戦争を回避するために新しい社会秩序、新しい政治を求めている。

第五に、教育と学習についての新しい考え方と方法を提示しようとする「学習のネットワーク」がある⁵⁸⁾。いままで、学校での中央集権的であり、画一的な教育は「唯一のプログラム、唯一の判断方法で万華鏡のように多様な人間の頭脳活動を教育し、点数をつけ」てきた。この教育システムを「機械的な頭脳のためには有効であるが、創造的な精神のためには向いていない」と批判しながら、新しい教育と新しい学習を唱えているネットワークがそれである。つまり、家庭学校、コミュニティー・スクール、学習交換、経験学習、大学の公開講座などが挙げられる。学習のネットワークに携わっている人々は、学校や教師、国語や算数、点数や順位などを評価しない。彼らは生まれた時から死ぬまで全生涯の中で、学ぶという姿勢を身につけ、好奇心を引き起こし、新しいものを創り上げる全人格的、内向的教育を目指している。

第六に、個々人の人格の成長を求める「成長のネットワーク」がある⁵⁹⁾。既存の宗教における教権制度や硬直化されたドグマには従わず、自らの潜在能力を引き出すため、あるいは自己を知るため、自分の精神の成長を求めている諸ネットワークである。例えば、超越的瞑想、座禅、ヨガと太極拳、吟唱などのためのネットワークがそれである。

第七に、全地球の進化を考え、望ましい未来づくりを目指す「進化のネットワーク」がある⁶⁰⁾。彼らは、人間の進化は今にでも起こることであり、その結果に責任を持たねばならないと考えている。それゆえ、彼らは世間に広まっている悲惨な地球と、そこに詰め込まれた後退し停滞する未来ビジョンではなく、喜びに満ちた明るいビジョンを見出す。彼らは未来は「偶然訪れてくる」のではなく、生きる未来を毎瞬間創り出すのだと考えている。このような進化のネットワークには、適正・代替技術の国際ネットワーク(Transnational Network for Appropriate/Alternative Technologies: TRANET)、国際女性ネットワーク(Women's International Network: WIN)、国際教育協会(Global Education Associations: GEA)、人間の諸権利インターネット(Human Right Internet)などが含まれる。

(2)新しい社会運動としてのネットワーク

ネットワークの形態や様式等は国家によって、地域によって異なる面もあるものの、産業社会の諸価値や諸原理に異議を申し立てると同時に、新しい価値、新しい文化モデルを唱えている点では大抵同じである。これをリップナックらは「もう一つのアメリカ」または「見えざる惑星」の建設として、ファーガソン(Ferguson, M., 1980)は「アクエリア

ンのたくらみ」として、そしてエルジン(Elgin, D., 1981)は「自発的簡素」な生活を選んだ人々の自発的連合としてそれぞれ説明している⁶¹⁾。彼らの議論を簡単にまとめると次のとおりである。

ネットワークに携わっている人々は、必ずしも一箇所で集まって新しい生活様式を協議したり、相談したりするわけではない。彼らは必ずしも意識的につながったり、協議して何をやろうとしたりすることはしない。けれども、彼らは同じ意識、同じ生活を追求しているというコミュニオンないしコンテクストを共有しているがゆえに、身近な家族や友人たちを越えてその輪は広げられる。彼らは新しい意識、新しい生活を自ら実行することによって、新しい世界を成し遂げようとするのである。

ところで、メルッチ(Melucci, A., 1989)によれば、このネットワークは一般的に水面下に潜伏しており、目だたないのが普通である。水面下で社会の支配的な傾向に対抗する「意味のシステムの転換」(a change in the system of meanings)を求めている。この潜伏期間中に新しい文化コードがつくられ、個々人はこれを直接に実行するのである。しかし、これらのネットワークは特別なイシューをめぐる水面から現れる。その際、特別なイシューだけを問題化するのでなく、社会システムの一般論理まで問題視するのである。それゆえ、このネットワークは文化モデルのオルターナティブを提示するようになり、トゥレーヌが言っている「新しい社会運動」であるといえる。

おわりに

ネットワーク、ネットワークングに対する批判の声も高い。例えば、今田高俊はネットワークはモダンの完成(効率化と選択性の強化を推進する手段)であり、ポスト・モダンではないという観点からネットワークングを次のように批判している⁶²⁾。彼は「情報ネットワークとか付加価値通信網とかは...(中略)...効率化ないし機能合理化を狙いとしたものであり、モダンの発想の延長線上にある。また、ネットワークは...(中略)...お手でつないで仲よしグループ...(中略)...や市場」などの発想とあまり違いのない、社会運動分野でのネットワークングは「住民運動ないし社会参加を効率化」しようとするものであると語っている。

考えるに、付加価値通信網などのネットワークはインフラとしてのネットワーク(道具的ネットワーク)であり、これは確かに、今田が指摘しているとおりに、効率化、機能合理化を狙ったものであろう。また、組織の効率向上のために形成されつつある「戦略的ネットワーク」もある。しかし、道具的ネットワークをインフラとして動いているネットワークング、特に自主的なユニット同士の緩やかな繋がりやネットワークを通じた社会運動などは、必ずしも効率の原理によって動いているわけではない。むしろ、その原理自体やその原理から生じた諸結果を批判して、その代わりに新しい原理や新しい価値の形成を目指しているのである。また、ネットワークングはただの仲よしグループではない。むしろ、新しい文化モデルを創造し、未来に向けて歴史の進むべき方向づけに努めるのである。そして、ネットワークも市場のように自律分散システムであるが、「合理的行為による自律分散システム」ではない。ネットワークは人類の歴史を省み、自分を吟味し、未来を創るための、つまり「自省的行為による自律分散システム」である。それゆえ、ネットワークはメンバー同士の自己実現、人格の成長を試みながら、協力し合い、助け合う暖かいシス

テムである。しかも、ネットワーキングはメンバー同士だけでなく、全人類の未来、この惑星の運命、つまり「宇宙船地球号」の過去、現在、未来を真剣に考えるのである。

最後に、ネットワーキングは必ずしも住民運動などの社会運動の効率化を求めるものではない。資源動員論もあるのは確かであるが、効率化を求めるなら旧来の労働運動のように組織をつくり、規約をつくるべきである。そのような組織による運動は究極的に他律性による支配であって、ネットワーキングはそれを批判するのである。ネットワーキングは、むしろメンバーの自主性、自律性に基づく緩やかな繋がりをもって、新しい価値、新しい文化モデルをつくらうとするものである。

ネットワーキングがネットワークの中核性格を備えているのは当たり前である⁶³⁾。問題は、ネットワーキングが硬直化されるのを防ぐために、いかに周辺性格であるオープン性、メンバーの重複性、冗長性を確保するのかである。この条件が満たされない場合、ネットワーキングはしばしば硬直的ネットワークになると批判を受けざるを得ない。例えば、日置弘一郎によると、情報独占に由来する排他的ネットワークが形成されると、それはしばしばサロン化される。そうすると、このサロンに参入すること自体が目的化され、本来の情報機能は副次的なものになりうる。そして、ネットワークは、「アリーナとしての人脈が特定の利害にさらされるとプレイヤーである閥」になりやすい⁶⁴⁾。日置が指摘しているとおりに、ネットワークはサロン化され、利害に縛られ、閥のように機能する可能性もありうる。しかし、オープンシステム、メンバーの重複性などを保証されるならば、このような誤謬に陥らないだろう。したがって、ネットワークをより活性化させ、同システムが自律的かつ相互交通的になるためには、中核性格ばかりでなく、周辺性格も備えるようにする必要があることを強調したい。

謝辞

査読者から貴重なコメントをいただいた。ここに厚く感謝申し上げたい。

注

- 1) トゥレーヌによれば社会運動とは、「敵手としての階級と対立し、具体的な集合体のなかで歴史性の社会的方向づけをめぐる闘争する、階級という行為者の組織された集会的な行動」であり、「文化的志向性と社会紛争とを分離してはならない」[A. Touraine 1978 *La Voix et le Regard*. Paris: Edition du Seuil (=1983 梶田孝道訳『声とまなざし』新泉社、113)]とされ、社会運動の「自己産出能力」が強調されている。自己産出能力とは、社会内外の諸変化に適応するために、その規範や目標を修正し、自らの行為に意味を与え行動し、歴史的に進むべき方向づけをすることである(杉山光信 1990「アラン・トゥレーヌと現代」徳永恂・鈴木広編『現代社会学群像』恒星社厚生閣、198)。
- 2) Anthony Oberschall 1978 "Theories of Social Conflict." *Annual Review of Sociology* Vol.4.: 291-315. (=1989 鶴飼孝造訳「崩壊理論から連帯理論へ」塩原勉編『資源動員と組織戦略』新曜社、59-91)。
- 3) 日本にも他の先進国と同じように1960年代から1970年代の高度経済成長期における社会構造の変化とその構造的な諸問題に異議を申し立てるものとして、学生運動、住民運動、公害反対運動、市民運動、反差別解放運動などの新しい社会運動が噴出した[似田貝香門 1986「日本の社会学社会運動」似田貝香門他編『社会運動』東京大学出版会 2-13、梶田孝道 1986「社会運動の理論 解説」似田貝香門他編、前掲書 17-21、梶田孝道 1990「戦後日本の社会運動」社会

運動論研究会編『社会運動論の統合をめざして』成文堂 179-201、渡辺登 1990「生活自治型住民運動の展開—池子米軍住宅反対運動を事例として」、社会運動論研究会編、前掲書 247-280、塩原勉 1985「思想の言葉」『思想』第737号 124-125等]。この新しい動きの起点は1960年代の日米安保条約採決をめぐる政治的対立であった。つまり、この闘争はかつてなく大量の無党派市民を登場させ、社会運動をナショナル・レベルやイデオロギーのレベルから、具体的な個人の生活レベルへと移行させたのである。この後続く1965年のベ平連、1968年の学生反乱、1970年代からは反公害運動と住民運動などが多発した。例えば、成田空港問題、名古屋新幹線公害問題、各地の原子力・火力発電所問題などが挙げられる。そして1980年代後半にはアメリカ軍や防衛庁の施設の建設に反対して立ち上がった「返子市池子米軍住宅建設反対運動」などは様々な資源を動員し、ネットワークを活用した運動であった。ちなみに、篠原一は、バーガー(Berger S., 1979)の言葉を借りて、これらの新しい社会運動による政治を「ライブリー・ポリティクス」(lively politics)と呼び、階級や宗教などの高度のイデオロギーによる「ハイ・ポリティクス」(high politics)、あるいは具体的利益を最大の争点とする「インタレスト・ポリティクス」(interest politics)と区別した(篠原一 1982『ポスト産業社会の政治』東京大学出版会、58; 篠原一 1985「ライブリー・ポリティクスとは何か」篠原一編著『ライブリー・ポリティクス』総合労働研究所、2-30)。

- 4) 高橋徹は1960年代後半から1970年代に噴出した黒人解放運動、学生運動、反戦平和運動などのアメリカの新左翼運動を紹介しながら、従来の集合行動とは異なると論じている。つまり、これらのニュー・ラディカリズムは、体制内改良主義としての「規範志向運動」ではなく、まさに体制そのものの根本的改革を図ろうとする「価値志向運動」を目指している。そして、彼らが追従するのは、もはやマルクス、レーニン、ブハーリンなどのイデオログでなく、カミュ、グッドマン、マルクーゼなどの実存的現代倫理に傾いている実存的ヒューマニストである。詳しくは次の文献を参照して頂きたい。高橋徹 1967「アメリカの新左翼は何か(1)」『世界』1月号 101-112、高橋徹 1967「運動としてのアメリカの新左翼—アメリカの新左翼とは何か(2)」『世界』2月号 53-68、高橋徹 1967「自由昂揚からブラック・パワーへ—アメリカの新左翼とは何か(3)」『世界』4月号 88-102、高橋徹 1967「決定に参与する民主主義—アメリカの新左翼とは何か(4)」『世界』6月号 151-166、高橋徹 1967「学生反乱—アメリカの新左翼とは何か(5)」『世界』10月号 130-145、高橋徹 1967「ステューデント・パワー—アメリカの新左翼とは何か(6)」『世界』12月号 128-141、高橋徹 1967「大学改革運動—アメリカの新左翼とは何か(7)」『世界』2月号 192-208、高橋徹 1968「黒人デットーのダイナマイト」『世界』4月号 203-216、高橋徹 1968「岐路に立つアメリカの学生運動」『世界』6月号 91-103等。
- 5) Neil J. Smelser 1962 *Theory of Collective Behavior*. New York: Routledge & Kegan Paul (=1973 会田彰、木原孝訳『集合行動の理論』誠信書房、365)。
- 6) 同訳、421。
- 7) A. Touraine 1984 *Le Retour de L'acteur: Essai de Sociologie*. Paris: Fayard, 281.
- 8) A. Touraine 1978 前掲邦訳、117。
- 9) 同訳、123。
- 10) 同訳、117。
- 11) 社会運動組織の運営原則は「民主集中制」、あるいは「民主主義的中央集権制」といわれる。北川隆吉(「社会運動の類型と組織」似田貝香門他編、前掲書、44-45)によれば、社会運動が反権力・反体制運動である限り、権力からの攻撃(圧迫、弾圧など)が加えられる。これに耐えるためには統一・団結しなければならない。それゆえ、組織の最末端から最高指導部に至るまで、効率的な意見ないし情報交換を図ると同時に、下部は上部に服従し、組織の決定には各メンバーが従うという「集中制」が保たれる必要がある。しかしながら、全体主義的・画一的傾向を内容として示すのではなく、あくまでも個人の民主主義的権利と党員としての平等の原則がその基盤となる。これは「党組織内部における規律と民主主義の均衡(民主主義的中央

- 集権)の原則、前衛組織と大衆との関係を律する原則、そして、あらゆる社会組織内部でのリーダーとメンバーとの関係を律する原則」(高橋徹・城戸浩太郎・綿貫譲治「集団と組織の機械化」『機械時代』岩波書店、1957、139)でもある。このような民主集中制は外の敵に対しては組織全体の力を集中して、効率的に闘うのに対して、組織内部においては、強制するのではなく民主主義の方法による教育と説得を行うものであるとされる(三浦つとむ『大衆組織の理論』勁草書房、1959、37)。要するに、民主集中制は、意思決定における「集中の原理」と、少数意見の尊重という意味での「民主の原理」を調和させる仕組みであるといえよう。しかし、状況によって「民主の原理」は必ずしもうまく守られなくなり、「集中の原理」だけになる可能性もあるだろう。
- 12) 三浦、上掲書、23-36。
- 13) Georg Lukacs 1923 “Methodisches zur Organisationsfrage.” in Georg Lukacs, *In Geschichte und Klassenbewusstsein, Studien über Marxistische Dialektik*. Der Malik-Verlag, Berlin, 1923(相沢久訳『組織論』未来社、1958、16)。
- 14) 三浦、前掲書、41-47。
- 15) 北川、前掲書、43-47。
- 16) 新都市社会学やレギュラシオン理論に依拠する新しい社会運動論さえ存在する[Alain Lipietz 1989 *Choisir l'audace: Une alternative pour le vingt et uniemesiecle*. La Decouverte. (1990 若森章孝訳『勇氣ある選択』藤原書店); Alain Lipietz 1990「レギュラシオン理論とマルクス主義」(聞き手; 若林章孝・井上泰夫)『週刊 読書人』(11月26日)、1-2; 中村陽一 1991「ポスト・フォーダイズムと新しい社会運動」山田鋭夫・須藤修編著『ポストフォーダイズム』藤原書店、193-212]。
- 17) トゥレーヌ(Touraine, A.)は脱産業社会をプログラム化社会と呼んでいる。その理由を彼は次のように語る。脱産業社会が出現するのは、投資が労働組織を越えて生産能力そのものに向けられる瞬間からである。本質的なことは生産システムに対する総体的介入である。つまり、もはや単なる活動の計算・分析ではなく、システム全体と分析を通じた生産システムへの介入が、それゆえにまた技術的認識から情報処理への移行が、脱産業社会における本質的な事柄なのである。脱産業社会は一システム内の諸要素間に見出される諸種の相互依存関係を理解し、この認識をプログラムとシナリオに転化するのである。この社会はもはや、それぞれの文脈から孤立した原因と結果との間に直接的連関を確立するというには執着していない。そうではなく、この社会は、複雑な一総体を所与の一状態に導くことができる様々の進路を見出すべく専心しているのである。それゆえに脱産業社会はプログラム化社会と呼ばれねばならない[A. Touraine 1980 *l'Après Socialisme*. Grasset, (=1982 平田清明・清水耕一訳『ポスト社会主義』新泉社、99)]。
- 18) メルッチ(Melucci, A.)は、ハーバーマスの複合社会という用語を使っている。複合社会とは、社会的分化が高度化し、人々の規範や欲求が多様化し、かつ絶えず変動している社会であり、諸個人と社会の自己内省能力、情報の生産が増大し、コミュニケーションの発展が進行していく社会である。その特徴は、①社会の主要な資源が情報である。②政治経済的意味でのグローバル化とは別に、社会的コード、シンボル水準でのグローバルな広がりが見られる。③自らを個別化しようと努める個人によって担われる(Alberto Melucci 1989 *Normads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*. Hutchinson Radius, 11-12, 185)。言い換えれば、高度情報化社会を称していると思われる。
- 19) A. Touraine 1978、前掲邦訳、113。
- 20) 杉山光信、前掲論文、207。
- 21) A. Touraine 1980、前掲邦訳、123-130。
- 22) 同訳、130-136。
- 23) 同訳、136-142。

- 24) J. Habermas *Technik und Wissenschaft als Ideologie*. Suhrkamp, Frankfurt, 1968 (=1970 長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊国屋書店、71-76)。
- 25) Claus Offe 1985 "New Social Movements: Challenging the Boundaries of Institutional Politics." *Social Research* Vol. 52, No. 4. Winter: 850.
- 26) ハーバーマスによると、伝統的社会においては目的合理的行動(労働)に対する制度的枠組み(コミュニケーション行為)の優位性が保たれたが、資本主義生産様式になると、その順位は逆転された。さらに、19世紀の最後の四半世紀以来の後期資本主義社会に至ると、体制の安定を確保するための国家の干渉活動の増大、科学を第一次生産力たらしめる、研究と技術の相互依存関係の増大に伴って、次第に生活世界の植民地化がもたらされた(Habermas 1968、前掲邦訳、59-76)。つまり、「経済及び国家による行政管理という下部システムが極めて複合化し、それに基づく強制的命令が、これまでは伝統的に営まれていた生活世界の中心領域まで侵食する」[J. Habermas 「インタビュー 合理性の行方(聞き手：轡田収・三島憲一)』『思想』第696巻(1982. 6)、78]ようになった。
- 27) J. Habermas 1981 *Theorie des Kommunikativen Handelns, II*. Frankfurt, 576-582. (=1981 轡田収・三島憲一訳「対話的行為の理論」『思想』第696巻：80-81)。
- 28) 上掲論文、82-85。
- 29) クラウス オフェ(Claus Offe) 1988 「インタビュー：現代資本主義の変容と社会運動」(矢沢修次郎訳)『思想』第773巻：63-77、寺田良一「環境運動の類型と環境社会学」社会運動論研究会編、前掲書、80-88、山口節郎 1985 「労働社会の危機と新しい社会運動」『思想』第737巻：15-36、伊藤りり 1993 「新しい社会運動論の諸相と運動の現在」山之内靖他編『システムと生活世界』岩波書店、135-139。
- 30) メルッチはトゥレーヌからは社会運動の構成要素である主体性、敵対性、全体性などを、ハーバーマスからは複合社会という用語や柔軟性のあるアイデンティティーなどの概念を継承している。その反面、メルッチはハーバーマスのシステムと生活世界の二元論に対しては、物質的な富の形成だけでなく、文化的富の形成をも目指す複合社会においては「経済や行政の領域も、価値・規範的な意味と関わる文化的アイデンティティーの形成とその社会的サーキュレーションに、積極的に乗り出している」[山之内靖 1991 「システム社会の現代的位相(下)」『思想』第805巻：100]と批判している。そして、個々の闘争に歴史性を付与しているトゥレーヌに対して、メルッチは社会運動を「歴史という舞台において意識と行為の統一体として行動する一個の人物(a personage)」(Alberto Melucci 1984 "An End to Social Movements? Introductory Paper to the Sessions on New Movements and Change in Organizational Forms." *Social Science Information* Vol. 23, No. 4/5, : 825)として認識するのは、経験的な社会運動における実際の多様性と多元性から乖離させるものであると批判している。
- 31) Peter Berger and Brigitte Berger and Hansfried Kellner 1973 *The Homeless Mind: Modernization and Consciousness*. New York: Random House Inc. (=1977 高山真知子他訳『故郷喪失者たち』新曜社)。
- 32) Alberto Melucci 1989 *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*. ed. by John Keane and Paul Mier, ch. 5, ch. 8 (=1993 永易浩一、山之内靖訳「民主主義再考」山之内靖編『20世紀の社会科学のパラダイム』岩波書店、326-327)。
- 33) Alberto Melucci 1984 op. cit., 829.
- 34) Alberto Melucci 1989 前掲邦訳、345。
- 35) Alberto Melucci 1984 op. cit.: 825, Alberto Melucci 1985 "The Symbolic Challenge of Contemporary Movements." *Social Research* Vol. 52, No. 4.: 795.
- 36) Alberto Melucci 1989 *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*. Hutchinson Radius: 74.
- 37) Marilyn Ferguson 1980 *THE AQUARIAN CONSPIRACY: Personal and Social Transformation*

- in the 1980s*. New York: St. Martin's Press, Inc. (=1981 堺屋太一・松尾式之訳『アクエリアン革命』実業之日本社)。
- 38) A. Touraine 1984, op. cit., 291.
- 39) A. Touraine 1980 前掲邦訳、142。
- 40) Marilyn Ferguson 前掲邦訳、251-253; Duane Elgin 1981 *Voluntary Simplicity* New York: c/o John Brockman Associates Inc. (=1987 星川淳訳『ボランタリー・シンプルシティ』TBSブリタニカ)。
- 41) A. Touraine 1980 前掲邦訳、143。
- 42) Alberto Melucci 1984 op. cit., 829.
- 43) Luther P. Gerlach 1970 "Corporate Groups and Movement Networks in Urban America." *Anthropological Quarterly*. Vol. 43: 123-145, Luther P. Gerlach 1971 "Movements of Revolutionary Change: Some Structural Characteristics." *American Behavioral Scientist* Vol. 14, No. 6: 812-836.
- 44) トゥレーヌはプログラム化社会において、規定的なものは職業身分ではなく、組織とその管理とに対する関係であると語りながら、その諸カテゴリーを以下のように分けている。① テクノクラート(組織の諸目的の決定に参加する階層)、② ビューロクラート(諸目的に到達する諸手段を選択し、コントロールし、強制する人々)、③ オペレーターの全体(目的と手段という双方の決定には参加しない組織に帰属して、組織と運命を共にし、また多くの場合、組織の権能によって庇護される)、④ 助手(企業内の地位によって保護されていない、特殊には臨時雇用の労働者と下請企業の給与生活者である)、⑤ 専門家(ある企業への帰属によってではなく、社会的に承認された権利能力を保持する職業についている)などである(A. Touraine 1980、前掲邦訳、15)。
- 45) 同訳、120-147。
- 46) A. Touraine 1984 op. cit., 280.
- 47) Alberto Melucci 1989 op. cit., 77-79.
- 48) これらに関しては、主にリップナックとスタンプスの分類に則ったものである。
- 49) J. Lipnack & J. Stamps 1982 *Networking*. New York: Ron Bernstein Agency Inc. (=1984 社会開発統計研究所訳『ネットワーキング』プレジデント社、55-74)。
- 50) 同訳、75-105。
- 51) Makoto Maruyama 1988 "Local Currency as a Convivial Tool: A Study of Money Uses from the Point of Substantive Economy." *The Meiji Gakuin Review* No. 436. *International and Regional Studies*, No. 3. December.: 73-74、須藤修 1990「社会システムとネットワーク」新田俊三編『社会システム論』日本評論社、99-100、須藤修 1991「ネットワークと市民運動」季刊『子どもと食文化』秋2号、全国学校給食を考える会、8; Paul Ekins eds. 1986 *The Living Economy* London: Routledge & Kegan Paul. (=1987 石見尚ほか訳『生命系の経済学』お茶の水書房、223-224)。
- 52) 須藤修、前掲論文、8。
- 53) アーバンハウジング オルタナティブ ハウジング プロジェクト 1990『アーバンコレクティブハウジングの提案』財団法人アーバンハウジング。
- 54) J. Lipnack & J. Stamps 1982, 前掲邦訳、107-136; J. Lipnack & J. Stamps 1986 *The Networking Book: People Connecting with People* New York and London: Routledge & Kegan Paul: 45-60.
- 55) Amory B. Lovins 1977 *Soft Energy Paths; Toward a Durable Peace* Friends of the Earth Inc. (=1979 室田康弘他訳『ソフト・エネルギー・パス』時事通信社)。
- 56) Duane Elgin 前掲邦訳、20。
- 57) J. Lipnack & J. Stamps op. cit.: 61-80、J. Lipnack & J. Stamps 1982 前掲邦訳、137-170。
- 58) 同訳、171-204。
- 59) 同訳、205-234、J. Lipnack & J. Stamps 1986 op. cit.. 81-97.
- 60) *ibid.*, 120-136、J. Lipnack & J. Stamps 1982 前掲邦訳、235-269。
- 61) これらは必ずしも同じ次元での議論ではないけれども、同じ文脈の中で理解することができる。

つまり、ファーガソンの透明の知性をもつ人々が変化の手段として選ぶのがネットワークであり、エルジンの自発的簡素な生活の求めている人々を結び付ける仕掛けがネットワークであるといえる。

- 62) 今田高俊 1988「自己組織する情報社会」『組織科学』第22巻第3号：65-66。
- 63) 筆者が考えているネットワークの中核性格は自律性、目的・価値の共有・共感、分権性などである。これに関する詳しい内容は拙稿 2001「ヒエラルキー組織論批判とそのオルターナティブ」(島根県立大学総合政策学会『総合政策論叢』第2号：117-135)を参照していただきたい。
- 64) 日置弘一郎 1991「ネットワークの論理と倫理—近未来組織とネットワーク」『組織科学』第25巻第2号：16-20。

キーワード：社会運動 新しい社会運動 ネットワーキング 階級闘争 合理的運動
自省的運動

(PARK Yonggwan)